

藤田湘子の四百句選 拾遺II十九句 野本 京選

令和八年一月一日 (2026.01.01)

子のために朴植ゑ五月慰むか	『雲の流域』	115
白鳥に餌撒き声かけ男さみし	『白面』	129
呼び馴れて女淡しや蝸牛	『狩人』	183
寒に生れ寒の蜆を吻すふも	『一個』	244
早梅やひらがなの名の吾子ふたり		244
虚空より色の流れて椿落つ		259
師の忌過ぎわが忌近づく濃あぢさる		287
冬用意してシャンソンも絶やさずに		322
わが裸草木蟲魚幽くあり		
荒草は土をえらばず鰯雲	『去來の花』	403
兩眼の開いて終りし晝寝かな	『黒』	518
友情のごときふぐりと春深し	『前夜』	567
海牛のなんと偉せきうな貌	『神樂』	636
白日に蝶の交りしうつつかな	『てんてん』	679
白椿落ちたる音に囚はれし		690
年移りをり我の名はわれのもの		696
鬼の死のこと伝はらず鬼やらひ		698
寒の梅心身とかく背き合ふ		690
狐火の傳くならば彼岸まで		707
		715